

奄美大島の季節

—— 季節をあらわす方言について ——

— 12月14日受理 —

福田 一也*

鹿児島藩士名越左源太は、嘉永年間、島津家のお家騒動に関係して、大島に遠島されたが、在島中の見聞所感をその著「南島雑記」に残した。そのなかに大島の4季について、つぎのような一文がある。

「新玉の年立帰る初春より、余寒なく、早暖になれども、雨勝にして快晴なく、長閑なる春の景色もなければ、木伝ふ鶯も春を告ぐれども高音なく、ホケキョの声も漸くにして早し。(中略)亦吾藩の桜木一二本移し植えて、木は大木になりし計り、花稀稀に萎縮して桜の花の如くならず。(中略)

さて花も散り、春過ぐれば、蚊の声軒端をまとうて、賤屋の蚊遣火空を覆う。柴の庵のいぶせきもいと意苦し。五月雨の一日も晴る事なく、水無月旅の道すがら、往来の野道の松の蔭漲る清水の夕暮、願う折なるあつき日も、山茂りて海近く、涼しき風の絶間なく、暑さをしのぐは安けれど、草の庵の憂き夢を驚くばかり。萩の葉に秋を告げてん吹き初むる風のみ繁き山嵐。梢のみどり隙間もなく、細谷川の水絶えて、雨はいたく降るとても、木々には霜の花咲かで、山に紅葉の色もなく、染まぬ木の葉を染まぬとか。時雨は冬の初めとや、降りそふ雨に時ならぬ水かさ増りて、神無月霜降る月も寒からで、今は田面にせく水の賤が心もせかれつ。苗代急ぐ頃なれや、亦唐芋の葉も青く、年に替りて暖かき、芋を植えても吉野山、花咲く春の過ぎ行かば、飢を凌ぐの為ならん。暮れ行く年のいまだにも、袷羽織の肌持は、貧しき民も暖かに愛づべかりける島なれや。」(昇曙夢：大奄美史 p 553)

このなかに、南島奄美大島の4季のさまが、おぼろげながらも、わりあいしっかりと描かれている。すなわち、季節の差は本土のそれのように、はっきりしたものはなく、たとえば、桜についてみると、花がひらくのと若葉がしげるのとは、ほとんど同時であり、また、楓は紅葉することもなく、一般の樹木には落葉もみあたらない。かって霜雪をしらず、いわば、常夏の国としてうたわれている。

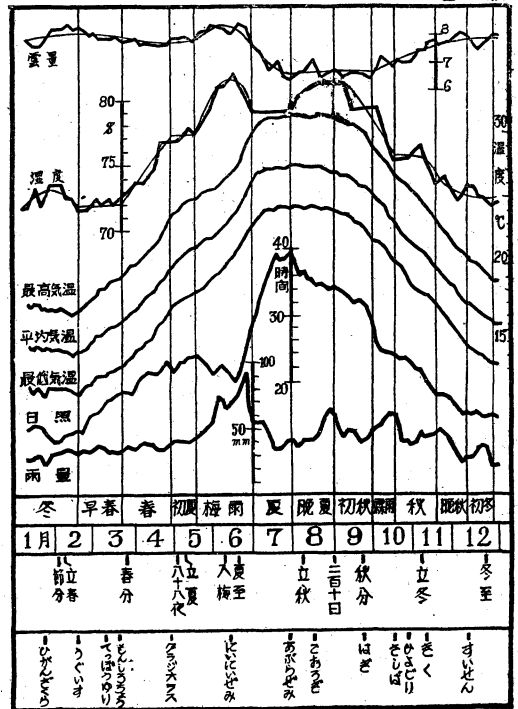
このような状態の島の気象のうつりかわりを、季節として把握することは、なかなかむずかしいことである

が、南島雑記の文章にもしめされたように、注意深い観察の結果と、気象資料を併用すれば、ある程度実情にかなった季節の分類ができるだろうと考えられる。この見地から民間に伝承されてきた、季節や天候をあらわすことばを調査、整理し、累年気象資料の年変化と対照して、季節の分類をおこなった。

気象に基礎をおいた季節の分類には、全国的なものとしては高橋先生の御研究、局地的なものとしては浜田地方の季節をとり扱った坂田先生のすぐれた論文がある。いずれも1年を10種の季節に分類されている。本稿における季節の分類も、累年気象資料上で不連続的な変化をする点を求めて季界としたことは、前記の二論文と大体同様であるが、ここでは方言との対照上、12種の季節に分類した。(下図参照)

季節一覽表

名瀬



1. 早春・2月15日～3月21日

(註1) この季以前に年間最低気温が出現することもあるが、

* 名瀬測候所

この季の始めごろにでることもある。しかし、この季にはいと、気温は日ましに暖くなり始め、水蒸気量も漸次ましてゆくが、温度は冬季とほぼ同様のままである。よく東支那海南部に低気圧が発生し、急速に発達しつつ、北東進を始めるため、強い寒冷前線の通過がしばしばみられたりする。天気は週期的に変化し、5~7日間ぐらゐの間隔で寒波が襲来し、海上の交通はもっとも注意を要するところとなる。琉球において、二月風廻り(カジマーズ)^(註2)と称される荒天厄日は、当地方の一部では二月風もさといわれて、この季の終りごろにあたる。

しばしば、附近を通る低気圧の暖域にはいり、芽生える草木に適當の雨量をもたらす。この雨を木筋雨(キブツメ)^(註3)といい、このころの天候を一月キブツメなどという。またやや強い南風が吹いたりするが、これにのって、冬期間南方にいた渡り鳥(ヒヨドリなど)が北上するといわれている。この南風を鳥南(トリバイ)という。

この季は顕著な寒波の吹きだしによって終るのであるが、このころ大雨がもたらされる。この雨を桜流し(サクラナガシ)と称し、三月サクラナガシともいう。

2. 春・3月22日~4月25日

寒さはずいぶんやわらぎ、気温は急速に上昇して、終りごろになると小笠原高気圧もみえ始め、夏を思わせるような天気が4~5日ぐらゐつづくこともある。すなわち、暖気が浸入し、寒さは完全にこの季でなくなり、水蒸気量、温度、日照ともにましてゆくが、平均風速はしだいに小さくなって、好天の日の多いのをしめす。このころの天気を三月赤山(ハーヤマ)^(註4)と称し、降りそうでなかなか降らず、大陸より飛来する黄砂や、風塵のために、春に白穂のつくのもこのころである。概して年中でもっともよい行楽の季節である。

3. 初夏・4月26日~5月15日

この季にはいと、天気変化の週期は長くなるか、またはすっかりくずれてしまう。小笠原高気圧の発達が目立ち、帯状高気圧が硫黄島附近より、沖縄附近まで東西に伸びることが多く、天気は安定した型をしめし、気温、水蒸気量ともにゆるやかに上昇増加し、湿度、日照ともに大きな変化はみせない。この初夏の前半の期間は、三月ハーヤマと称される天候のつづきと考えられるが、後半では梅雨の先ぶれで、ハンシと称される大雨現象もみられる。この雨を本格的な梅雨と区別し、大流し(オーナガシ)ともよんでいる。

4. 梅雨・5月16日~6月29日

5月なかばごろより梅雨にはいるが、5月いっぱいはまだ初夏の延長ともみられ、気温は急昇するにいたらず、降水量も四月大ナガシと称され、初夏よりやや増加するにとどまり、本格的梅雨にはまだならない。しかし、初夏とのはっきりした区別は、悪天候、雲量の増加、湿度の急昇、日照時数の減少などによってしめされる。5月末から6月にはいと、ホンナガシ^(註5)と称してい

る、本格的梅雨に突入し、気温は急昇をたずけてゆく。年によってはこの梅雨がなく、いわゆる空梅雨で、干ばつ^(註6)となることがあるがいたって少く、例年豪雨、洪水^(註7)となる。全年を通じて雨の多い土地ではあるが、この梅雨季の降水量は圧倒的に多い。

5. 夏・6月30日~7月29日

梅雨前線は北上し、北九州や日本海附近を低気圧が往來し、小笠原高気圧は硫黄島附近より、沖縄附近まで張り出す。ために当地近海では南よりの風や南西の風が、やや強く吹き始める。この風をアラバイ^(註8)といい、アラバイが吹き始めると、梅雨があけいよいよ夏が来たことを知る。この南風の吹走する時期は、この季の前半の10~15日間ぐらゐで、風速は10m/s以上に達することもあって、漁夫や、船員の間では注意すべき時期として知られている。アラバイが止むと、いよいよ安定した夏の天気である。アラバイの期間を含めて、この30日間の天気を六月日照(ヒドリ)と称し、降水量は少く、連日晴天^(註9)が

6. 晩夏・7月30日~8月28日

この季は年中でもっとも台風襲来数の多い期間で、豪雨もたらされて、暴風の脅威にさらされる。台風の襲来しない限りは前季夏とほとんど同一で、安定した天気となるが、やや日ざしにきびしさがおとろえ、気温はわずかながら下降してゆくのはいなめない。この季の後半は降水量が多く、台風の襲来の多いことを語っている。このころはちょうど、旧暦の盆にあたるころで、盆荒れ(ボンアレ)と称している。また盆南(ボンペー)、盆東風(ボンゴチ)ということばでこのころの天候をあらわすこともあるが、やはり台風に関連したものである。

7. 初秋・8月29日~9月27日

8月末から気温は下降し始める。このころ発達した積乱雲から、俄雨が降ったりすることが多いが、降水量は少く、雨量は年中でもっとも少ない、さわやかな好晴の日がたつづく。この俄雨を虹雨(ノーキアム)とよんで、また八月ノーキ雨などといい、このころの天候をあらわす。台風が来ない限り、年中でもっともよい季節であるが、盛夏を思わせるような残暑の日がたつづくことが多い。これを八月テダ^(註10)、あるいはモドリテダなどという。

8. 霧雨・9月28日~10月12日

夏型の天気から冬型の天気うつる過渡期として、天気はぐずつき型となり、短期間ながら秋流し(アキナガシ)と呼ばれる雨期としてしられている。年によってこの雨期は、1月もずれることもあるが、豪雨大雨^(註11)があったり、洪水となったりする。

この季の終りごろに北の季節風が吹き始める。これを新北風(ミーニシ)と呼んでいる。ミーニシが吹き始めると、大陸高気圧の圏内にはいり、小笠原高気圧の影響がおとろえたと考えてよいわけである。このころ「さし

ば」(鷹の一種)が渡来してくるが、これはミーニシにのってやってくるといわれている。天気はしぐれ模様となり、俗に**鷹糞雨(タークス雨)**と呼び、**九月タークス**ともいう。

9 秋・10月13日～11月11日

霖雨をすぎると、気温は依然として下降の一途をたどり、雲量もしだいにまして冬らしくなってゆくが、この季の中ごろになると比較的好晴の日がたつづく。すなわち、移動性高気圧の往来が頻繁で、一週間ぐらいの週期で天気は変ってゆく。このころになると、思いだしたような気温上昇の日が2、3日たつづき、夏を思いださせることがある。^(註12)台風もこの季が最後で、これ以後にあらわれることはほとんどなく、台風の来ない限り寒波の襲来も冬や早春のように頻繁さと激しさが無いので、海上の方もわりあいおだやかな日がつづきやすい。このころの^(註13)天気を称して**ノークタ**といい、おだやかな海上を**ウナン**^(註14)**ドレ**という。

10. 晩秋・11月12日～12月6日

前の季節の終りごろ、近海あるいは東方洋上を通過した、今年最後の台風や、低気圧のあとなど、強い寒波の襲来があってこの晩秋は始まるのであるが、晩秋というよりすでに初冬といった感じである。しかし、初冬と違う点は気温の冷却がじょうぶん進んでおらず、初冬にはいるまで急速に下降してゆき、秋には安定していた湿度も、この季にはいるとますます乾燥の度を加え、雲の多い日がつづく。大陸高気圧も発達して平均風速は冬と同程度である。降水量は前半は多く、後半は後につづく初冬、冬と同様に量的には少い。

11. 初冬・12月7日～12月26日

晩秋には急速に下降していった気温も、この季にいたるとややゆるやかになる。水蒸気量も同様で、湿度は年中でもっとも低いが、晩秋およびこのころの天気を**霜月シツタリ**と呼んでいる。いんうつな天気がつづく意味である。しかし、初冬はまだ完全に冬型の天気とはいえず、ときどき好晴の日が一週間ほどつづくことがある。

12. 冬・12月27日～2月14日

夏以来下降をつづけてきた気温も、この季にはいるとほとんど安定する。天気は平均5～7日ぐらいの週期で変転し、一週期の約半分は6m/s以上の北風が吹き、10m/s以上が2日も連続して吹くことは普通で、時には3～4日間も吹きつづけることがある。このため群島間の交通もただえ、もっとも便の悪い時期となる。好晴の日もわずか1日ぐらいしかつづかず、風向は不安定で、いつ季節風の吹きだしがあるかわからないといった天気である。この間の事情を**師走南(シハスバイ)**といって、^(註15)天気が良くても注意を怠らないようにと戒めている。

冬も終りごろの一月下旬から二月上旬にかけて、ときどき1日2日暖かい日がつづいたりすると、桜も咲きそ

めて早くも春来るの感をうける。一雨一雨と暖かさに向かうようでありながら、実際はこの季の末ごろが、年間最低気温のあらわれる極寒の時期である。

註1 名瀬に於ける年間最低気温

① 第1表 最低気温出現期日の分布

旬	Ⅱ	I	Ⅰ	Ⅲ	計
上	0	6	13	4	
中	0	7	9	0	
下	4	7	5	3	
計	4	20	27	7	58

②最低気温の極値(4.9℃以下)

3.1℃	1901	Ⅰ	12
4.1	1917	Ⅰ	7
4.5	1900	Ⅱ	7
4.6	1913, 1934, 1936.		
4.9	1947		

③暖冬(7.0℃以上)

8.5℃	1929～1930 (1929, Ⅱ)
72	1849
71	1914

註2 二月風廻りについて

不連続線による、風向の変転を風廻りと称している。琉球では、旧暦2月には15日間に7回も風が廻るといわれている。時に二月風廻りと称される荒天厄日は、冬至から数えて86日目の日で、だいたい3月16日前後にあたる。これは今から400年ほど前、久米島の堂の大親(堂の比屋とも書くようである)という人の残した日和見の中に、海上では相戒むべき日として定められたものである。ちょうど台風に対する210日のようなものである。

註3 千葉徳爾: 天気語彙(本誌Vo.12. No.2)に

- キノメオコシ 早春の雨をいう
徳島県祖谷地方
- キノメナガシ 木の芽の出るころの長雨
鹿児島県肝属郡

とある。似たもののように思われる。

註4 樹木が若葉から青葉にかわり、山々が活気を呈してくるという意味で、このころ山火事がもっとも多くなる。

註5 ナガシは長雨のことで、普通にナガシといえれば本ナガシをさす。大ナガシと本ナガシの区別はむずかしい。単にハシリ現象であるばかりでなく、やはり降りかたにその差があるように思われる。

註6 過去60年間に、梅雨期の干ばつとしての記録は4回を数えているが、いずれも空梅雨とはいえない。大島の水稲はこのころが最高分ケツ期から出穂期のころにあたるので、異常に入梅がおそかったり、出梅が早かったり、あるいはその期間が短くなったりすると被害が大きくなる。

註7 豪雨の原因(第2表)

第2表 名瀬における豪雨の原因(日量150ミリ以上)

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	計
台風	-	-	-	-	-	2	7	10	2	6	2	-	27
前線	-	-	-	-	2	9	-	-	2	3	-	-	16
低気圧	-	-	-	1	2	1	-	-	-	-	3	1	8
計	0	0	0	1	4	12	7	10	4	9	5	1	53

註8 ハイは南風である。アラバイは新南であるが、荒南とも書ける。新北風(ミーニシ)に対してこれから南

季節風季の始まりだという意味では前者がよく、海上では荒天になるという意味では後者がよい。沖縄で夏至南(カーツバイ)と称され、夏至より約15日間ぐらいを南風の強い時期としているが、カーツバイによって、やはり梅雨があけるとしているのを見ると、当地のアラバイと同じものである。

註9 名瀬における年間最高気温

①出現期日の分布

第3表 最高気温出現期日の分布

月	V	VI	VII	VIII	IX	計
上	0	0	18	7	2	
中	1	1	9	5	0	
下	0	5	7	3	0	
計	1	6	34	15	2	58

②最高気温の植値(35.0℃以上)

36.5℃	1953	VII	7
36.3	1942	VII	38
35.8	1955	VII	6, 5
35.6	1941	VII	7
35.5	1925, 1926		

③最高気温の低い年(32.9℃以下)

32.5℃	1899
32.6	1907
32.7	1904
32.9	1911

註10 テダは太陽、日射の意

註11 霖雨について

またはつきりあられる年と、あられのない年とがあり、季節のひとつとして霖雨をもうけることは一考を要する所である。

また(註7)の豪雨の原因参照

註12 沖縄では十月夏ガマと呼んでいる。

註13 ノーは糸、クダは朽ちるの意。天気がつずき毎日釣にゆくので、釣糸が朽ちるほど良い天気がつづくという意味である。

註14 ウナンは牝牛、ドレは風の意。徳之島の牝牛が、沖永良部島に売られていった仔牛の啼声に心ひかれて、海を泳いでいったという話から、牝牛が泳いでゆけるほど静かな海だという意。

註15 桜の開花について

彼岸桜の開花は平年発現月日は1月16日(統計年数21年)満開は2月9日(統計年数20年)となっているが、開花と同時に若葉もでてくる。

むすび

気象に基礎をおく季節の分類は、天文学的分类とちがいで、いろいろ困難な点を伴うがより実用的なものであって、その土地との結びつきが大きいのを自的とする。土地の天候や気象に関係したことばの調査は、気象資料による季節の分類にあたって有力な補助手段となろう。この見地から奄美大島のこのようなことばを調査整理し、参考としつつ、季節の分類をおこなった、その結果だけのことばを主として紹介してみた。もっと完全な分類や、本土の季節との差については後日の機会にゆずりたい。

ここに紹介したことばのうち、その半数は鹿児島県大島支庁の奥山真義氏におうた。またいろいろ御指導と便宜をいただいた比嘉所長やその他のかたがたに対しても厚く御礼申しあげます。

新刊紹介

火災便覧 日本火災学会編
B6判 1620頁 特価 1,800円 理化書院発行
コロナ社 発売

火災学会で編集した火災便覧がとうとうでき上がった。紹介者は火災学会の中でこの企画が初めてから、ずっとその一部分のお手伝いをして来たので、完成の喜びは一層である。それでこれの批評ではなくて紹介を敢えて買って出たわけである。

ハンドブックや便覧は専門別にいろいろできている。ことに電気工学ハンドブック等は30年近い歴史をもっていて8回の改訂が行われ、すでに定評のあるものである。本便覧は最初の第1版であるから内容の精粗不揃いという点、項目に若干の脱漏がありはしないかという懸念等もないことはないが、まずわれわれの予期以上のできばえである。これは原稿の校閲やゲラの校正に中心となって骨を折られた編集委員の献身的な御苦労の結果でもある。紹介者が分担した部分の校正刷の場合にも、内容にいささかの不審でもあるとチャント赤でリマークがついて廻って来るので、これだけ気を配って見ていられるのだから、この便覧は相当いいものになるなというのが、その時からの期待ではあった。

内容は第1編から第12編までと附録としての資料編とがある。各編の題目を挙げて見ると基礎科学、火災気象、統計、火災危険、建築火災現象、消火通報設備、建築防火、都市防火、消防、森林火災、犯罪と火災、規程類となっている。第1編の基礎科学はわれわれが一番参考になる編であろう。この編の主査は金原寿郎博士で7人の分担執筆で、内容は温度測定、熱量測定、各種発熱現象、

輻射、熱伝導、熱気流、燃焼の化学、木材の燃焼(この中には木材の含水量のこともある)、消火法の種類、危険性化学薬品にわたっている。便覧であるから文章は簡潔に、必要な表や式や図はできるだけもり込む方針がとられている。編中の各章の終りには引用した表や式や図の文献がまとめて挙げてあるのは行き届いた配慮である。

第2編は紹介者が編主査で4名の分担執筆であるが、この編については気象の専門家からのいろいろの批評があるものと覚悟している。第3編統計の内容は第1章が統計数理、第2章以下に突出度数、出火原因等の実際の火災統計と日本の大火の統計とがある。火災危険以下の各編でも気象の関係が思わぬ所に飛び出して来て紹介者自身ちょっと驚いた点もある。

第10編森林火災は武田京一博士が主査となり林業試験場関係の執筆者でまとめられたので、その方面の資料が十分に入り、われわれには大変便利である。例えばちょっとさがして見ても林の防火力と耐火力とか、林地推積物の含水量と可燃性とか、迎え火とか、防火線等という項目が眼につくのである。第11編は犯罪と火災で、ここにもちょいちょい気象関係が顔を出す。実況検分や発火部認定方法等の章があり、放火犯捜査の端緒に関する実例、放火犯取調上の留意点、放火および失火に関する刑法の解説に及んでいる。もし本便覧を読み物として見るならこの編が一番興味が深いであろう。

この便覧を個人で購入されることはむづかしいこともかも知れないが、内容は上記のようで、手近かにあれば甚だ便利なものであることは確信する。会員の所属の機関毎に備えられるよう希望に堪えぬものである。

(畠山 久尙)